

ベリス・メルセス宣教修道女会

100年

最初の宣教派遣100周年のロゴとモットー

100.mmberriz.org

A faint, stylized illustration of a sailboat with a single mast and a large sail, sailing on waves. The illustration is in a lighter shade of blue than the background.

モットー 標語

創立（最初の宣教派遣）100周年のイメージを制作するにあたり、私たちは、皆様のアイデンティティの核心を捉えつつ、それを今日という時代にシンプルかつ力強く、そして明確に伝えることができる表現を求めています。それは単に美しい言葉を見つけることではなく、記憶、カリスマ、使命、そして未来を結びつけることのできる直感を形にすることでした。

考察の中心には、マルガリタ・マリアの言葉が力強く浮かび上がっていました。「贖いの霊が、私たちを宣教女にしてくださった」。そこに根源があります。変容の源があります。修道会の歴史を形作ってきた内なる活力があります。呼びかけ、遣わし、支えてくださる霊があります。そして、その受けた衝動を具体的に生きる形としての宣教があるのです。

しかし同時に、ある疑問が浮かび上がりました。すなわち、修道会や教会の専門用語に詳しくない人々に対しても、その真理を簡潔かつ分かりやすく、そして開かれた形で、今日どのように表現すべきか？カリスマの深みを損なうことなく、いかにしてそれを伝えるか？内外に響き渡るような表現とはどのようなものか？

その模索の末、次のような標語が生まれました：

いのちを与えるために
国境を超える

短い言葉ですが、深い意味が込められています。そこには、動き、出発、国境、献身、豊かさ、そして希望が表れています。これはマルガリタ・マリアの言葉に取って代わるものではなく、それを現代に近づけるものです。創設の言葉は源を示し、この標語は現在におけるその具体的な姿を表現しています。

超えて

超えて（横断する）動きのある言葉です。それは、すでに終わった行為や完結した歴史を指すものではありません。それは、今もなお続いている何かを物語っています。この言葉は、修道会が「道」を歩み、「外へ」出て、「開かれた姿勢」でいることを示しています。それは、じっとしていない言葉であり、通り抜け、切り開き、移動し、探し求め、自らをさらけ出す言葉なのです。



いのちを与えるために
国境を超える
ベリス・メルセス宣教修道女会

この言葉は、ベリスのメルセダリアとしての私たちのアイデンティティの、非常に深い次元に触れています。宣教使命は、決して単なる外向きの活動ではなく、この世に生きる一つの在り方そのものでした。宣教女であるということは、遣わされることを受け入れ、慣れ親しんだ場所を離れ、地理的、文化的、人間的、そして霊的な距離を越えていくことを意味してきました。それは、他の言語を学び、他の町に住み、他の傷と向き合い、他の探求を受け入れ、そして道中で出会うものによっても自らを変容させていくことを意味してきたのです。

『超える』は、宣教使命を果たす帆船「ビンタ」が持つ象徴的な力を表現しています。軽やかで、簡素で、状況に応じて柔軟に対応できるこの船は、前進し、風に身を任せ、広大な海を渡るために造られました。この船は、困難な海をも航海しうる、共有され、共同体としての使命を如実に表しています。これは「定置」のイメージではなく、「道程」のイメージです。これは「力」のイメージではなく、「献身」のイメージなのです。

その意味で、「超える」という言葉は過去を指すだけでなく、現在や未来をも指しています。100年が経った今も、この動きは続いています。その使命は、文化、無関心、孤独、不正義、脆弱性、そして人々や世代、感性の間の隔たりといった新たな境界線を超えるよう、今も私たちを招き続けています。「超える」ことは、今もなお愛する一つのあり方なのです。

国境-境界

「国境」という言葉には、歴史、使命、そして福音の重みが込められています。国境は、通過点であり、緊張が走る場所であり、出会いのある場所です。そこには、人々を隔てるものがはっきりと見える一方で、何か新しいものが生まれる可能性も秘められていま

す。国境には、違い、距離、脆さ、待ち時間、そしてより充実した人生への可能性が現れるのです。

私たちの宣教の歴史は、越えてきた数々の国境によって形作られています。ベリスから他の町や大陸へと私たちを導いた地理的な境界。学び、耳を傾け、現地の文化に溶け込み、異なる生き方に心を動かされるよう私たちを招いた文化的な境界。そして、脆弱さ、貧困、排除、抑圧、あるいは希望の欠如といった状況に私たちを近づけた、人間的な境界、そして、信仰が、信頼と献身、そして日々の誠実さによって試される、霊的な境界線があります。

しかし、境界線は外側にあるだけではありません。それは私たち自身や私たちのコミュニティの中にも存在しています。恐怖や安逸、抵抗、そして守ってくれる一方で閉ざしてしまうこともある安心感の中に、境界線があります。直視するのが辛い傷の中に、受け入れるのが難しい変化の中に、学ぶのが困難な言葉の中に、新たな在り方を求める新しい現実の中に、境界線は存在します。境界線を超えるということは、イエスの神によって、何度も何度も、自らを変えさせ、新たに創り直されることを受け入れることでもあります（MMB 2024年総会文書）。

私たちの贖いのカリスマから観る時、国境には特別な意味があります。国境があるところには、囚われ、孤独、不正、隔たり、あるいは命の危機が存在する可能性があります。そしてそこでは、私たちのメルセダリアとしての召命が力強く響き渡ります。それは、近づき、留まり、寄り添い献身するために、自由といのちへの道を切り開く場となります。私たちにとって、国境とは、多くの場合、福音が私たちを待ち受けている場所なのです。

ですから、創立100周年において「国境について語ることは、忠実さと未来について語ることなのです。この100年の間に私たちは多くの境界を越えてきました。そして今もなお、私たちの時代における新たな境界 移民、貧困、人身売買、孤独、暴力、共通の家の荒廃、無関心、文化的・霊的な傷、そして新たな形の束縛 を認識するよう招かれています。いのちが脅かされている場所において、聖霊は私たちに、神の恵みと憐れみのしるしとなるよう、再び呼びかけておられます。

ために

「～のために」は、短い言葉ですが、決定的な意味を持ちます。この言葉がモットー全体の方向性を定めています。これがないと、「国境を超えて」という言葉は、単なる移動や

旅、あるいは移動そのものに留まってしまうかもしれません。しかし、この言葉があることで、標語に意味が生まれます。「～のために」という言葉は、目的や方向性、そして識別をもたらすのです。

宣教使命とは、単に移動することではありません。ただ通り過ぎるためでも、ただ外へ出るためでもありません。「向かう」という言葉は、あらゆる派遣が招きから生まれ、より大きな善へと向けられていることを思い出させます。宣教使命には理由があります。そこには地平があり、期待される実りがあります。そこには、福音に深く根ざした理由があるのです。

この言葉は、カリスマの最も重要な鍵の一つを表現するのに役立ちます。すなわち、宣教は活動主義からではなく、内なる体験から生まれるということです。贖いの霊こそが、人々を動かし、招き、変容させ、遣わすのです。宣教運動は、深い泉、すなわち「新たに知り、愛した」（マルガリタ・マリア）ナザレのイエスとの深い体験から生まれます。だからこそ、「～のために」という言葉は、このモットーの核心を守っているのです。それは、外へ出ること、魂があり、その道には意味があり、国境を超えることは常に命への奉仕に向けられていることを思い出させてくれるからです。

また、これには「識別」に特有の側面も含まれています。すべての歩みが実りあるとは限りません。すべての動きが建設的であるとは限りません。すべての進歩が人間性を高めるわけではありません。「～のために」という言葉は、静かに問いかけます。どこへ向かうのか？誰のために？どのようないのちに奉仕するのか？この問いかけこそが、使命が散漫になるのを防ぎ、それを霊的な根源と結びつけ続けるのです。

マルガリタ・マリアの言葉 「贖いの霊が私たちが宣教女にしてくださった」 には、「～するために」という意味も込められています。霊は、遣わすために私たちを変容させてくださいます。それは人生の指針であり、このモットーの言葉は、まさにその論理を反映しています。すなわち、寄り添い、守り、解放され、実りをもたらされることを待ち望む命があるからこそ、私たちを突き動かす力が存在するのです。

与える

「与える」という言葉は、福音の精神に深く根ざしたものであり、私たちにとって極めて身近な言葉です。それは「賜物」や「献身」、「無償の愛」、「奉仕」を意味します。また、自らを捧げる生き方や、愛から生まれ、具体的な行動

として表れる使命についても語っています。

宣教修道会という文脈において、この言葉はとりわけ重要な意味を持ちます。宣教は、単なる「拡大」や「活動」として表現されると、誤解されがちですが、「与える」という言葉は、宣教を別の次元、すなわち「献身」の次元へと位置づけるのです。宣教使命とは、自己主張ではありません。それは、いつでも応じられる姿勢です。所有することではありません。それは、与えることです。自己中心的なことではありません。それは、他者へと向かうことです。

「与える」ことは、キリスト教の最も深い伝統とも結びついています。神はご自身を捧げられる。キリストはご自身を捧げられる。キリスト教の生活とは、受け取り、分かち合う献身から理解されるものです。この意味で、この言葉には聖体、贖い、そして復活秘義的な次元が内包されているのです。すなわち、他者が命のために自らを捧げる生き方です。

「与える」という言葉は、教育、寄り添い、ケア、共にいること、尊厳の擁護、傾聴、奉仕、そして多様な人々や現実への親しみなど、多くの具体的な物語を通じて読み解くことができます。多くの修道女や信徒が、言葉だけでなく、行動をもってこの物語を紡いできました。それは日々の献身の行動であり、小さいなが

らも誠実な行動であり、それらが命のための場を切り拓いてきたのです。

「与える」ということは、また、謙虚な姿勢で使命を果たすことを意味します。それは私たちが誰よりも上に置くのではなく、共に歩み、求め、苦しみ、待ち望む人々の傍らにとどまるのです。いのちを与えるということは、いのちを所有したり支配したりすることではありません。それは、いのちに奉仕することを意味します。いのちの芽生えに寄り添い、その環境を大切にし、脅かされたり狭められたりしているように見える場所でも、命が育つよう手助けすることです。

しかし、宣教生活における「与える」ということは、同時に「受け取る」ことを知ることでもあります。この100年の間、宣教とは、私たちが共に歩んできた人々や民族、そして今日も共に歩んでいる人々や民族から、多くのいのちを受け取ることを意味してきました。彼らと彼女たちは私たちが形作り、新たな顔を与え、神の御顔を私たちに示してくれました。彼らは私たちに福音を告げ知らせ、神の国に献身する教会であるよう教え、あるいは他の宗教の中に神の神秘を見出す手助けをしてくれました。私たちの「与える」ことは、感謝に満ちた「与える」ことなのです。

いのち

「いのち」という言葉は、このモットーの意味を広げ、普遍的なものへと昇華させます。誰もがその意味を理解できます。それにもかかわらず、その言葉には計り知れない深みが込められています。いのちとは、希望であり、尊厳であり、自由であり、未来であり、和解であり、成長であり、豊かさであり、新たなスタートを切る可能性そのものです。この言葉は、冒頭の考察に登場した「種」のイメージと非常に直接的に結びついています。それは、殻を破って開かれ、新たな命として芽吹く種です。そのイメージは、変容、豊穡、プロセス、そして小さなものの中に大きな力が宿っていることを物語っています。

『いのち』はまた、カリスマが持つ贖いの直感を、現代の私たちにも理解しやすい形で捉えています。「贖い」という言葉には計り知れない深みがありますが、教会の言葉に馴染みの薄い人々には説明が必要かもしれません。「命を与える」という言葉は、その本質を失うことなく、その直感を表現しています。贖うとは、閉じ込められていた場所に命を開くことです。限界があった場所に地平を広げることです。傷があった場所に希望を差し伸べることです。何か新しいものが芽生えることを可能にすることです。

だからこそ、ここでの「いのち」は単なる一般的な言葉ではありません。それは宣教使命の結実であり、大切に守り、寄り添い、育んでいくべきものです。人々のいのち。国々のいのち。共同体のいのち。文化のいのち。信仰のいのち。被造界のいのち。そして、脆さの存在と優しさ、そして献身を必要とするあらゆる場所にあるいのちです。このモットーにおいて、命は道のりの行き先として現れます。いのちを与えるために、その道を横切ります。何かが生まれるために、国境を超えます。他者がよりよく息ができるように、自らを犠牲にします。歴史が希望へと開かれ続けるように、霊に応えます。

いのちを与える

私たちのカリスマにおいて、「いのちを与える」という言葉は、メルセス会の「第四誓願」以来、非常に特別な響きを持っています。今日、私たちはこれを「兄弟姉妹たちの益のために必要とされるならば、たとえ命を失う危険があろうとも、宣教の現場にとどまること」と表現しています。この表現は、初期のメルセス会士たちの本来の第四誓願、すなわち、命や信仰が危険にさらされたキリスト教徒の身代わりとなるという、そのラディカルな行為を継承し、再解釈したものです。

「いのちを与える」という言葉は、全身全霊の献身を連想させます。それは、自らのいのちを捧げるイエスに従うことを思い起こさせます。それは、使命がそれを求める時にも揺るがない愛の形であり、言葉だけにとどまらない献身であり、人生全体に関わるものなのです。

私たちにとって、この誓願は泉のようなものです。それは私たちの霊性と神との出会いを養ってくれます。また、マルガリタ・マリアが修道会全体に浸透させたいと願った贖いの精神を表しています。この誓願こそが、私たちが自らの召命と宣教への応答に焦点を合わせ、MMBとしての意義を見出す中心点なのです。すなわち、キリストのように、自らの命を捧げるまで兄弟姉妹を愛するということです。

「いのちを与える」という言葉は、私たちのアイデンティティを示します。それは、他者が命を得られるように、自らの命を捧げるということです。この言葉は、私たちの宣教的・解放的な霊性の核心を捉えているため、私たちにとって極めて深い意味を持っています。それは単に自分の一部を捧げるということではなく、自らのいのちを、他者のいのちのために捧げる贈り物とするということです。

ですから、このモットー標語において、「いのちを与える」という言葉は、マルガリタ・マリ

アの言葉を、私たちの今日の使命と直接結びつけています。もし贖いの霊が私たちを宣教女として召されたのなら、その霊は、献身的な生き方として具現化されるのです。私たちは愛に動かされて国境を超えます。兄弟姉妹の命が大切だからこそ、私たちは宣教の現場にとどまるのです。私たちが与えるのは、まず「贈り物」となるよう召されたいのち、すなわち「恵み—Merced」を、一人ひとりのために、全人類と被造物のために、すでに受け取っているからです。

モットー全体

全体として読み解くと、「いのちを与えるために国境を超えて」という言葉は、深く宣教的かつ贖罪的なアイデンティティを、簡潔かつ現代的な形で凝縮しています。

「超えて」という言葉は、動き、出発、派遣、そして献身を表します。

「国境」という言葉は、宣教の場を具体的に示します。すなわち、境界、距離、傷、違い、あるいは呼びかけがある場所です。

「ために」は、意味、方向性、そして識別が込められています。

「与える」は、使命を、贈り物、献身、そして第四誓願という福音的な論理の中に位置づけます。

「いのち」は、カリスマの豊かさ、希望、そして解放の力を集約しています。

この言葉の構造は極めてシンプルでありながら、非常に深い意味を持っています。動きから始まり、実りへと至ります。出発から始まり、いのちへと結実します。使命と意味を結びつけ、開放と実り、派遣と希望を結びつけています。

マルガリタ・マリアの言葉と合わせると、このモットーはさらに深い意味を帯びてきます：

贖いの霊は、私たちを宣教女として遣わしてくださいました

いのちを与えるために**国境**を超えて
最初の言葉は源を名指し、二番目の言葉は今日におけるその目に見える姿を表現しています。

第一の言葉は、変容をもたらす聖霊について語っています。

第二の言葉は、その聖霊が生み出す動きを示しています。

第一の言葉は、誰が彼女たちを宣教女としたかを語っています。

第二の言葉は、その宣教がどこへ向かっているかを語っています。

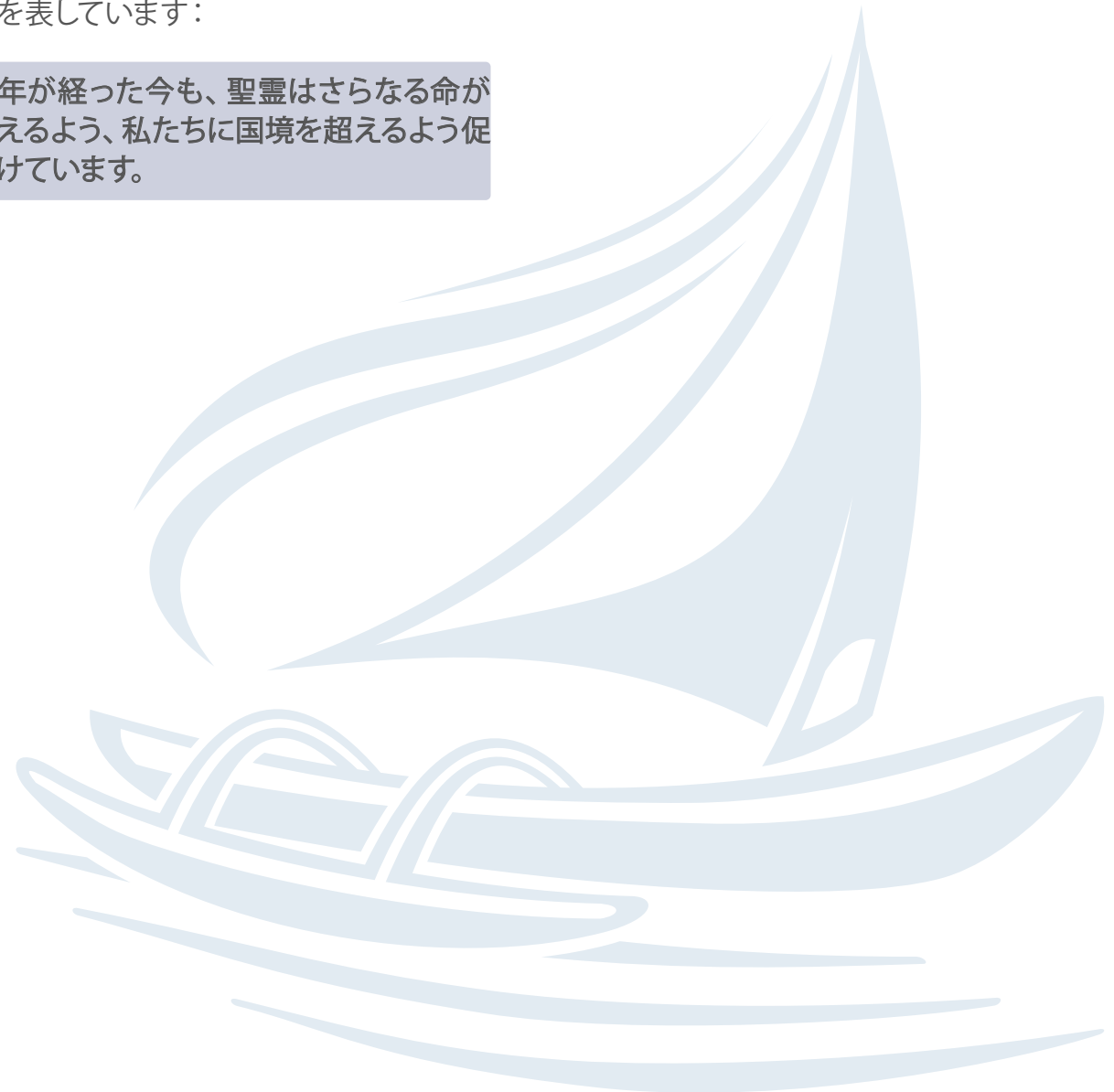
そして第四誓願は、そのすべてを内側から照らし出します。それは、兄弟姉妹の益のために必要とされるならば、たとえいのちを失う危険があっても、その使命に留まり続けるということです。つまり、イエスのように境界を越え、他者が命を得られるよう、自らの命を捧げるまで愛するということです。

このように、このモットーは、私たちの本質を明確な言葉で表現する助けとなります。それは私たちの歴史、カリスマ、そして使命を凝縮したものです。私たちの霊性を理解している人々だけでなく、外から近づいてくる人々とも語り合うことを可能にしてくれます。過去を記憶しつつも、前を見据えています。根から生まれながらも、新たな道を切り拓いていきます。

「いのちを与えるために国境を超えて」という言葉は、この創立100周年を象徴するのにふさわしいものです。なぜなら、それは一つの歴史を語るだけでなく、今もなお続く使命についても語っているからです。それは、神との深い出会いから生まれ、世界へと遣わされた修道会について語っています。また、聖霊に導かれて、人々のそばに寄り添い、

奉仕し、心を開き、実りをもたらす存在となる人生についても語っています。一言で言えば、それは単純でありながら深い確信を表しています：

100年経った今も、聖霊はさらなる命が芽生えるよう、私たちに国境を超えるよう促し続けています。



ロゴ

創立100周年のイメージを考えるにあたり、私たちは、私たちの歴史の深層にあるものを表現できるビジュアル・アイデンティティを求めています。それは、聖霊から生まれた使命、歩み始めた人生、そして他の人々が命を得られるよう国境を超えていくという招きです。

このイメージは、私たちが自分自身を認識する助けとなることを願っています。この100年にわたる感謝の記憶をたたえつつ、同時に未来へと開かれていくことを目指しています。そのため、このロゴは、私たちが深く共感するいくつかの直感から生まれました。それは、動き、開放性、使命、普遍性、湧き出る命、私たちを駆り立てる聖霊、そして兄弟姉妹の益のために求められる場所に留まるという招きです。

この考察の中心にあるのは、マルガリタ・マリアの言葉です：
“贖いの御霊が、私たちを宣教女にしてください”

この言葉が根源です。ロゴは、その躍動感を可視化しようとしています。閉じ込めるのではなく、送り出す霊。単なる思想にとどまらず、献身的な生へと変わる贖い。そして、今もなお国境を超え続ける宣教の召命。

ビンタ

ロゴのメインイメージは、ビンタにインスピレーションを得た船です。ビンタは、私たちの視覚的伝統において、宣教の営みを表現する象徴となっています。ビンタは、出発、道、そして宣教のしるしです。



この小舟は、宣教を生きる具体的な姿を物語っています。小舟は、じっとしているために存在するものではありません。前進し、海を渡り、風に導かれ、岸から岸へと命を運ぶために作られています。それはシンプルでありながら、深く宣教的なイメージなのです。

舟はまた、共同体をも象徴しています。誰も一人で航海することはありません。使命は他者と共に歩み、他者と共に識別し、他者と共に支え合うものです。舟の中には、分かち合う生活、共に派遣される、自らの弱さを受け入れる姿勢、そして聖霊が今もなお道を切り開いてくださると信じて旅立つ人々の信頼が、すべて包み込まれています。

この舟はまた、慣れ親しんだ場所を離れ、異国の言葉を学び、他の人々に寄り添い、宣教によって心を広げていった多くの姉妹たちの歴史を私たちに思い起こさせます。この船は、そのような「動き」の記憶を宿しているだけでなく、今日の旅路についても問いかけてきます。私たちはどのような海を渡らなければならないのか、どのような人々が待っているのか、どのような境界が私たちを呼んでいるのか。

この船には、安定感を呼び起こす側面的な要素が組み込まれています。この部分は非常に重要です。なぜなら、宣教には推進力だけでなく、バランスも必要だからです。出発も必要ですが、共同体も必要です。大胆さも必要ですが、根付きも必要です。

この一節は、宣教使命を支える共同体の生き方の象徴として読み解くことができます。共同体は、荒波を乗り越える力を与えてくれます。旅路が過酷になった時、私たちは共同体の助けによって、識別し、立ち止まり、進むべき方向を見失わず、献身を貫き通すことができるのです。

ここには、MMBの第四誓願との共鳴も認められます。私たちの贖いの召命は、単に外へ

出ることだけでなく、兄弟姉妹の益がそれを求める時に、宣教の場に留まることにも表れています。留まることは、境界を越える深い形です。留まることは、他者の人生が私たちの存在、忠実さ、献身を必要とする時に、その場に留まり続けることを意味します。

ですから、このロゴは個人主義的あるいは英雄的な使命を語るものではありません。それは、持続的で、共同体的な、そして具現化された使命を語るものであり、根を張っているからこそ前進できる使命。遣わされたと自覚しているからこそ、リスクを冒すことができる使命。献身の精神に支えられているからこそ、命を与える使命なのです。

帆と風

帆は、この絵の中心を占めています。それは高く掲げられ、広げられ、風を受け入れています。そこには、私たちの霊性の最も深い核心の一つが見出されます。すなわち、使命は私たちの力だけから生まれるのではなく、呼びかけ、動かし、支え、遣わす霊から生まれるのです。

風は直接目には見えませんが、その存在は帆の動きに現れています。聖霊もまた、そのように働かれます。常に捉えられるわけではありませんが、変容させ、方向づけ、後押しし、道を

切り開いてくださいます。それゆえ、帆は「受け入れる姿勢」の象徴なのです。風に向かって開いてこそ、前進することができるのです。



私たちにとって、ロゴのこの部分は、使命が「聴くこと」から生まれることを思い出させてくれます。国境を越える前に、神との深い出会いがあります。旅立つ前に、招きがあります。いのちを授ける前に、受けたいのちがあります。開かれた帆は、信頼、献身、そして応需性という内面の姿勢を表しています。

帆の立ち上がるような形は、希望を物語っています。それは重く閉ざされた帆ではなく、軽やかで、高く掲げられ、前を向いた帆です。それは未来、推進力、地平線を示しています。100周年は単に過去を振り返るだけでなく、聖霊が今もなお私たちの中に開こうとされているものへと目を向けていることを、私たちに思い出させてくれます。

海

海は舟を支えています。それは、私たちの使命が広がる開かれた空間です。創立100周年の記念展示において、海は世界、人々、そして私たちが遣わされた地平線の象徴として描かれています。



私たちにとって、海は広大さを物語っています。それは、文化、道、出会い、リスク、そして約束の広大さです。海は決して完全に安全な場所ではありません。だからこそ、信頼が求められるのです。航海とは、不確実性を受け入れ、脆さを認め、それでもなお、旅立つことを意味します。

海はまた、新たな境界をも表しています。それは閉ざされた空間でも、管理された空間でもありません。それは通過する場所です。今日、その海には多くの名前が付けられています。移住、孤独、貧困、暴力、人身売買、心の傷、文化の変化、共通の家の脆さ、新たな意味の探求などです。いのちが脅かされる場所こそ、宣教が再びその場を見出す場所なのです。

海上の舟は、国境を越えることが、単に遠くへたどり着くことではないことを私たちに思い出させます。それは、慈しみを込めて近づき、見つめることを学び、道が陰しくなっても立ち止まり、神が依然として水のただ中で働かれていると信頼することです。

動き

帆と船を彩る線は、動きを表現しています。それらは風であり、道であり、地平線であり、潮流であり、推進力です。画像の後方から生まれ、前方へと伸びており、受け継がれてきたすべての物語が、今もなおその使命を後押しし続けているかのようです。



ロゴの中で色鮮やかに描かれたこれらの線は、水、火、風、土という自然の要素の力と対話しながら、躍動感、豊穡、共同体、そして普遍性を表現しています。

視覚的に、これらの線はロゴが静的なイメージにならないようにしています。ロゴのすべてが、まるで旅路にあるかのようです。風が押し、海が支え、大地が豊穡をもたらし、光が地平線を開きます。これらの要素は、独立したシンボルとしてではなく、一つの宣教の運動の中に統合されて現れています。

また、これらは多様性も表現しています。それぞれの色が異なる響きをもたらしますが、すべてが同じ方向へと進んでいます。これは私たちにとって非常に意味深いイメージです。異なる文化、民族、言語、存在、そして感性が、一つの使命によって結ばれているのです。普遍性は、分散としてではなく、動き続ける交わりとして現れています。

エスクド

このロゴには、MMBのアイデンティティと創立100周年への言及が融合されています。これにより、組織の記憶と記念行事の新たなイメージを結び



つけることが可能となります。私たちは、この100年が具体的な歴史、カリスマ的な家族、そして受け継がれた使命から生まれたものであることを表現したいと考えました。

100周年のロゴマークは、私たちが、人々の名前、共同体、国々、派遣、仕事、疲れ、喜び、忠実さ、そして実りある歴史を祝っていることを思い出させてくれます。この100年は、生き生きとした記憶そのものです。

同時に、ロゴがイメージに統合されているその在り方は、この100周年を「原点回帰」の契機として捉え、これまでの歩みに感謝し、再び派遣される機会として捉える助けとなります。

こうして、このロゴは「アイデンティティ」「記憶」「使命」という3つの側面を結びつけています。私たちはMMBです。100周年を祝います。そして、いのちを与えるために、これからも国境を超えていきます。

色

100周年記念のカラーパレットは、国境を越える使命には、深み、動き、多様性、そして生命力を表現する必要があるという直感から生まれました。これらの色は、ロゴやスローガンを彩る小さな象徴的な言語としての役割を果たしています。



インディゴブルー

それは深み、内面、そして霊的な根源の色です。それは、表面的なものではなく、神との深い体験から生まれる使命を想起させます。そして、静けさ、自信、そして生きがいをもたらします。

深い青

「道」や「旅路」という側面を強調する。それは海や地平線、そして身を委ねる者に開かれる未知の世界へと私たちを誘う。旅の途上で、使命と広がり、そして確信を象徴する色である。

砂

大地や人々、そして具体的な現実とつながる。宣教は抽象的なものではなく、現実の場所で、現実の人々と共に、共に歩む道や多様な文化の中で行われるものであることを忘れないように。

金色

光と活気、そして温もりを与える。人を動かす霊、輝きを放つ生命、そして外へと踏み出す内なる力を呼び起こす。それは贅沢な黄金

色ではなく、エネルギーと輝きに満ちた存在感を示す。

大地の緑

豊穡、発芽、そして希望を象徴している。芽吹く種や、成長していく命と結びついている。それは実の色であり、使命を全うした時に芽生えるものの色。

全体

このロゴは、「歩み続けるアイデンティティ」を表現しています。方向性、風、水、地平線、そして生命に満ちたイメージです。そのすべてが「出発」を語りつつも、「ルーツ」をも物語っています。すべてが「動き」を語りつつも、「意味」をも物語っています。すべてが「使命」を語りつつも、「献身」をも物語っています。

MMB
100
年



いのちを与えるために
国境を超える
ベリス・メルセス宣教修道女会

このイメージは、感謝の念と開かれた心を持って100周年を祝う助けとなるでしょう。それは、私たちが歩んできた道を振り返ると同時に、聖霊の新たな呼びかけに耳を傾けることを可能にしてくれます。

Th舟は、私たちが遣わされていることを思い出させてくれます。

帆は、霊が私たちを後押ししてくださっていることを思い出させてくれます。

海は、世界が今もなおいのちを待ち望んでいることを思い出させてくれます。

線は、使命が動き続けていることを思い出させてくれます。

色は、カリスマの豊かさを思い出させてくれます。

標語モットーは、私たちの献身の深い意味を思い出させてくれます。

ベリス・メルセス宣教修道女会

100年

いのちを与えるために
国境を超える